Ⅰ．平成８年度事業概要

1　全体概要

平成８年度に実施した発掘調査は16事業・21遺跡で総面積は66,289㎡、遺物の整理・報告書の作成は４事業・10遺跡、報告書７冊と『年報』・『埋蔵文化財情報』を刊行した。

発掘調査面積は、平成４年度の36,710㎡から平成７年度の87,929㎡まで年々増加してきたが、５年ぶりに大幅な面積減少となった。これは平成２年度から本格的に始まった東海北陸自動車道関連の発掘調査が平成７年度に71,755㎡とピークとなり、平成８年度には28,823㎡に減少したことに起因する。また、調査地点が尾張部に集中するここ数年の傾向が今年度も続き、三河部の調査は吉田城遺跡の１遺跡にとどまった。しかし、平成９年度以降は第二東海自動車道建設にともなう発掘調査が三河部で計画されており、特に、次年度は豊田市域の発掘調査が多く、これまでの地域的な様相が大きく変化することになる。

報告書については、今年度から原稿を作成した翌年度に印刷・刊行する工程に変更したことから、平成７年度に原稿を作成した７遺跡について、４月以降印刷・製本にかかり、８月30日付けで刊行することができ、新たな報告書作成工程は順調にスタートした。

調査課は調査面積の減少にともなって４名減の39名となり、センター全体では管理課７名を含めて46名体制となった。

2．発掘調査

調査を実施した21遺跡のうち注目される遺跡としては、弥生中期末から後期にかけての人骨が昨年度分と合わせて20体出土した西春日井郡清洲町朝日遺跡、弥生前期・中期の環壕や旧河道から多量の古墳時代初頭の土器や木器が出土した一宮市八王子遺跡、７世紀後半の須恵器を焼成し何度も補修した痕が確認された名古屋市名東区高針原１号窯跡、城館の外側を区画するとみられる「薬研堀」状の溝を検出した豊明市大脇城跡、清須城の内堀と推定される地点から石垣や胴木が出土した清洲城下町遺跡などがある。

このほか、中世の島畑景観が良好に残る一宮市三ツ井遺跡、緑釉円塔や「僧」の墨書がある灰釉系陶器が出土した稲沢市下津北山遺跡、近世の街道沿いに展開した宿場町に関係するとみられる一宮市苅安賀遺跡などは、今後の調査や出土遺物の検討によって新たな遺跡の評価が行われるものと期待される。

（１）弥生時代～古墳時代

三ツ井遺跡では、古代から中世の遺物が出土した試掘調査の予測をこえて、縄文後・晩期の土器と弥生前期の土器や遺構を確認した。現水田下１ｍ下の縄文晩期から弥生前期の遺物が出土する黒色有機土層より多くのイネのプラントオパールを検出し、この地域における稲作の始まりを示す貴重な資料になる。朝日遺跡では、昨年度に続き東側隣接地を調査した結果、弥生前期の溝が貝殻山貝塚を囲むように巡っていることが判明し、弥生前期にも環濠が存在する可能性が高くなった。また、検出した人骨は昨年度と合わせて20体になり、その多くは屈葬姿勢で土坑に埋葬されており、埋葬に木棺が使用されたと推測できる例や方形周溝墓の溝内の土坑から出土した例もみられた。これまでの朝日遺跡の調査ではこれほど多数の人骨が出土した例はなく、今後、人骨の整理・分析によりこの地域の弥生人の解明に欠くことのできない貴重な資料となる。

弥生時代から室町時代まで継続して営まれた八王子遺跡では、用地買収や工事工程に合わせた小区画の発掘調査を進めたために、遺跡の全体像を把握することがなかなか困難であった。しかし、昨年度分と合わせた調査面積が23,500㎡になり、遺跡の概要が少しづつ判明してきた。特に、弥生前期・中期の環濠や方形周溝墓群、古墳時代初頭の大型掘立柱建物や昨年度末に検出した井泉など他にあまり類例のない遺構を検出しており、尾張北西部の拠点集落としての評価が再確認された。

（２）古代

志賀公園遺跡は古墳時代から近世にかけての複合遺跡で、各時期の特徴ある遺構・遺物を検出した。なかでも、７～８世紀の須恵器大甕や瓦などが出土したことにより、寺院や官衙など集落遺跡とは異なる遺跡の可能性も指摘することができた。高針原１号窯跡では、全長7.6ｍの窯体１基と付属施設の排水溝を検出し、遺物からⅠ-17号窯～Ⅰ-41号窯式期に生産の中心があったと推定される。また、窯壁にはスサ入り粘土を貼付し、何度も補修した痕が認められることや灰原が350㎡、厚さ２ｍにも及んでいることから、１基の窯で何度も修復を重ねながら大規模に生産が行われたものと推定される。また、高針原１号窯跡から出土した「月」の刻書、鴻ノ巣古窯跡から出土した陰刻花文のある須恵器など猿投窯の研究に貴重な資料の追加となった。

（３）中世～近世

下津北山遺跡では、幅３ｍの溝によって１辺が６０ｍの方形区画の西半部を検出した。区画の内部は数条の溝と柵によってさらに小さい区画が設けられ、掘立柱建物４棟を確認した。溝内から「僧」と墨書された灰釉系陶器・緑釉円塔・人形木製品、土坑から陶硯・三筋壺など宗教的な色彩の強い遺物が出土しており、今後の調査により遺跡の性格を解明することが課題として残されている。これまで文献記録しかなく、その詳細な位置が不明であった大脇城跡では、16世紀中から17世紀前半にかけての遺物とともに、溝、井戸、掘立柱建物、土坑を検出した。なかでも、幅３ｍ・深さ２ｍの「薬研掘」状の溝は城館の外側を区画する堀と推定することができ、大脇城の存在がより確かなものとなった。清洲城下町遺跡では、平成６年度の調査によって清須城内堀と推定される地点から多量の瓦とともに胴木と石垣の基底部を検出しており、今年度はその東側隣接地の五条川旧堤防下の調査を実施した。その結果、長さ１０ｍほどの石垣と石垣の下部構造の胴木や杭を３５ｍにわたって検出し、一昨年の調査成果とともに石垣の築造技術を解明する上で貴重な資料となる。

３．調査報告書作成・調査研究活動

昨年度に原稿を作成した７冊の調査報告書を８月に、『年報平成８年度』・『埋蔵文化財情報１２平成７年度』を３月に刊行した。また、次の７遺跡の調査報告書の原稿を作成した。

東海北陸自動車道関連として、『西上免遺跡』では前方後方墳の発生やその周溝から出土した廻間Ⅱ式期の土器群を詳細に検討し、『田所遺跡』では墳墓堂と推定される遺構や中世の集落を方形に囲む幅８～１０ｍの大溝を報告、『大毛池田遺跡』では県内では最も古く、広範囲に検出した古墳時代の水田遺構の構造と中世屋敷地区画の変遷について検討を加えた。このほか、『大縄遺跡』では12世紀後半～15世紀の区画溝に囲まれる集落を報告するとともに古代の瓦や中世と推定される鉄など鍛冶に関する基礎資料を提示し、『清洲城下町遺跡Ⅶ』では清須城本丸の内堀や石垣などの遺構を報告し、軒瓦の型式分

類や瓦の統計処理を行った。また、『円通寺古墓』では近世農村部の調査例として、都市部に偏りがちな近世墓調査に新事例を加え、鎌倉時代初頭の灰釉系陶器生産の『ＮＡ335号古窯跡群』では、床面下施設を有する窯３基を報告する。

また、『年報平成８年度』には調査研究員の積極的な取り組みにより、調査研究編として５本の論文を載せることができた。

４．普及・啓発活動

埋蔵文化財展は、豊川地域文化広場桜ケ丘ミュージアムを会場にして、県教育委員会及び豊川市教育委員会と共催で、８月３日から17日までの13日を期間として「新出土品展 '96」をテーマに開催した。近年、本センターが調査した朝日遺跡・八王子遺跡・西上免遺跡・大毛池田遺跡や豊川市教育委員会が調査した駒場遺跡・白鳥遺跡などの成果を時代別にパネルや復元模型などを使って展示・解説した。西上免遺跡や白鳥遺跡など県を代表する遺跡の出土品を初公開したこともあって、１,９５０名の入場者があり、埋蔵文化財に対する関心の高さ実感することができた。また、講演会は奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターの山中敏史集落研究室長によって「発掘された古代地方の役所」を演題として、三河国府の推定地である白鳥遺跡や全国の国府関連遺跡の最新の調査成果をお話しいただいた。期間中に埋蔵文化財展の遺跡についての調査成果を調査員が体験談を交えながら解説する講座や弥生土器の平底甕、Ｓ字状口縁台付甕、戦国時代の内耳鍋を復元し、「米を炊く」実験を行なった。実験に参加した８０名は20分ほどで炊きあがった赤米を試食し、それぞれの時代に思いを馳せた。

発掘調査技術等研修会は、県内市町村の埋蔵文化財の担当者を対象として研修会(Ⅰ)･(Ⅱ)として、各２日間行った。研修会(Ⅰ)では「埋蔵文化財保護の現状と課題」などの講義と名古屋市北区志賀公園遺跡において実際に調査区の堆積物の観察からさまざまな情報を読み取る研修を行った。研修会 (Ⅱ)では、これまで県内では調査例が少ない水田遺跡の調査をテーマとし、本センターが調査を行った大毛池田遺跡や静岡県埋蔵文化財調査研究所矢田勝氏により静岡県の水田遺跡の調査例を紹介し、奈良国立文化財研究所工樂善通埋蔵文化財センター長の「水田遺跡の調査法」、福岡市教育委員会山崎純男氏の「北部北九州の初期水田」、自然科学から見た水田遺跡の調査の留意点などの講義があり、今後、増えると予測される水田遺跡の調査に備えた。

現地説明会は、八王子遺跡（一宮市）、大脇城跡（豊明市）、清洲城下町遺跡（西春日井郡清洲町）の３遺跡で実施した。昨年に引き続き２度目の現地説明会となった八王子遺跡では、弥生時代後期から古代にかけての住居跡・河道跡・区画溝などの様子を400名が見学した。大脇城跡では、城館の外側を区画すると推定される「薬研堀」状の溝を中心に現地説明会を実施したところ、城郭研究者や地域の人々300名が参加した。また、清洲城下町遺跡では石垣や胴木の出土が注目されたこともあって400名の参加者で賑わった。（中川真文）